

# 入門期における古典の取扱について

—— 文法指導の一考察 ——

畑 実・鈴木洋一郎・佐藤クニ子・酒井 為久

## I

われわれは入門期の古典を取扱うとき、その指導上、2、3の方法を考えた。まず古典への関心や興味を調べ、計画的に多くの現代訳のものを鑑賞させながらその読む力を把握し、更にわかり易い文語文や短い漢文に親しむように指導した。そして昨年は入門期の古典読解におこる誤答や古典として読む漢文学習の困難点を調査し、また文法学習において所謂体系的な方法と機能的な方法をとってクラス毎に実験してその結果の一部を発表した。本年はその反省にもとづき、残された助動詞の問題について実施したが、その結果について報告する。

## II

助動詞の指導に当っては、その学習効果の実態を知るために調査を3回実施し、それぞれの結果を分析して、次の指導を考えるようにした。そして第Ⅱ次と第Ⅲ次の調査では問題の内容形式を同じようにして指導の結果が比較できるようにしてみた。

### 1. 第Ⅰ次調査

この調査は1学期に文語文に慣れ、また、品詞について若干の知識をもち、助動詞の概要がわかった後、学習態度を知るために実施した。2学期の初めであるので、夏休の宿題である助動詞の学習の成果も知ることができた。

#### 文法学習の調査

##### 1. 文法学習の好悪

文語文法の学習は古文解釈のために、必要なものであるが、この学習に対して次の調査に記号で答えよ。(自分の最も適当するものを1つ記号で書け)

- イ 文語文法は割合規則的な活用など機械的に暗記され合理的にまとめられていてよい。
- ロ 文語文法は古文解釈に必要なので難しいが努力して覚えようとしている。

- ハ 文語文法は古文解釈に必要なのであるが、仲々学習してもわからない。
  - ニ 文語文法はきらいで、学習してもわからない。
  - ホ 文語文法はきらいで、学習することはない。
2. 文法学習の困難な原因
- 文語文法の学習の難しさにはいろいろな原因があると思うが、次の中からあてはまるものがあれば、その記号で答えよ。適当なものがなければ「その他」の項に文で書け。
- イ 中学のとき口語文法を十分やっていたから。
  - ロ 文語文法を文の中で講義説明しているため、まとめにくいから。
  - ハ 現代かなづかいと違うので、活用など……おぼえにくいものが多いから。
  - ニ 古文に十分慣れていないので、口語のようにすぐ意味がわかっていないから。
  - ホ 「その他」
- ( )
3. 文語文法の品詞の難易
- 品詞の中では(未学習の助詞を含めて)学習するのに難しいもの、易しいものがあるがその順序をそれぞれ3つずつ書け。
4. 助動詞学習の困難点について
- A記憶 助動詞の学習ではまず多くの記憶することがあるが、次の3つの中で難しい順序に書きなさい。
- イ 受身……などの種類の名をおぼえること
  - ロ 他の品詞との接続、また助動詞相互の接続関係をおぼえること
  - ハ それぞれの助動詞の活用をおぼえること。
- B記憶(学習)の方法……助動詞の学習ではどんな方法をとるか、1つあげよ。
- イ ただ方法を考えず、1つ1つ暗記してゆくだけ……ただ暗記
  - ロ 活用の型などその語形から考えてまとめ

る……活用中心  
 ハ 接続中心の分類を重視してまとめる  
 ……接続中心  
 ニ 種類からその属する助動詞をおぼえてしまふ……種類中心  
 C 方法の難しさ……学習にはBの(イ～ニ)のような方法があるがどの方法をとるか最も難しいと思うか、記号で答えよ。(イ, ロ, ハ, ニ)  
 D 難しい助動詞……多くある助動詞の中から種類(意味)、活用、接続などで特に文中にあるとき難しいと思っている助動詞を3つ(終止形)書け。

この調査の結果が〔表I〕であるが、次のようなことがわかった。

- イ、文法学習が古文解釈に必要なことはわかっていて積極的に努力しようとしても、仲々むずかしくて、躊躇しているものが多いようである。
- ロ、そしてこの学習の困難さは、まず古文に十分に習熟していないところからくるのであるが、また中学のときの文法学習の不十分さに原因しているのは指導上反省させられる。
- ハ、品詞では勿論、助動詞を最もむずかしいとするものが圧倒的であるが、助詞や動詞、形容動詞など用言がこれにつづいている。
- ニ、この助動詞の学習においては①種類、②接続③活用上からの分類で覚えて行くのが普通であるが、接続関係の学習が最もむずかしく、活用の学習が次で、種類は比較的覚えやすいものようである。
- ホ、しかし、学習するときはこれと反対に種類(意味)を第1とし、活用、つづいて接続関係を考えるという所謂体系的な学習によっているものが非常に多い。したがってこの順序と違って、その接続関係の指導が徹底すれば、助動詞学習の盲点が解決できると思われる。
- ヘ、助動詞の中でむずかしいとしているものは、一語で文中にある位置によっていろいろと意味をもつもの…(る、らる、べし、らむ、けり、また、わかりやすいものは一字のものや、口語訳に近い読みかたをするもの……(つむ、らしむ)である。

## 2. 指導の経過 (1)

この学習態度調査の後で、学習効果の調査をした

が、この効果をみる前に次のような順序で古文の指導をした。

まず短文を中心とする古文入門のテキストをもたせ、教科書の文章とともに、文中における助動詞の機能に関心をもたせるようにし、また巻尾の助動詞の活用表を利用させながらまとめるようにした。夏休に課したテキスト中の助動詞の問題については、その不明なところを2時間授業をして指導した。

## 3. 第Ⅱ次調査

今までの指導の結果を考えて、活用、接続、種類(意味)などを加えた次のような調査を実施した。

一、次の文を読んで、問に答えよ。

年頃思ひつることはたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて尊くこそおはしけれ(そもそも)参りたる人ごとに、山へのぼりしは、何事かありけんゆかしかりしかど、神へまゐるこそ本意なれとおもひて山までは見ず

(1) 下線①～⑩は次のいずれにあたるか、助動詞にあたるものの番号を表中に書け。

(2) 下線①～⑩中で助動詞であるものの活用のしかたを考えてその活用型を次によって示せ。答は記号で書け。

イ 四段活用型    ロ 下二段型    ハ ラ変型  
 ニ ナ変型    ホ 形容詞型    ヘ 形容動詞型  
 ト 特殊型

二、次の和歌の下線の部分を正確な口語になおせ。

(歌全部の解釈は不要)

(例) 住ままほしくぞ思し召す

(答) たい(ことだ) 「たい」と書いてもよい終止形で

- 袖ひちてむすびし水の凍れるを春立つ今日の風や解くらむ
- 心ざし深く染めてしをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ
- 春来ぬと人は言へどもうぐひすのなかぬ限りはあらじと思ふ
- 鶯の谷より出づる声なくば春来ることを誰か知らまし
- 春日野の飛ぶ火の野守出でて見よいま幾日ありて若菜摘みてむ
- あすか川若菜つませむ片岡のあしたの原は今日ぞ焼くめる
- 春の着る霞の衣ぬきを薄み山風にこそ乱るべら

なれ

- 8 折りつれば袖こそにはへ梅の花ありやとここにうぐひすの鳴く
- 9 宿近く梅の花植えじあぢきなく待つ人のに香あやまたれけり
- 10 月夜にはそれとも見えず梅の花香をたずねてぞ知るべかりける
- 11 色も香も同じ昔に咲くらめど年経る人ぞあらたまりける

三、次の9つのグループの下線について、助動詞ならば意味を(完了、打消……など)、また活用語尾の一部ならばその品詞(動詞、形容詞、形容動詞)のらんに○をつけよ。

- |    |   |
|----|---|
| れ  | ① ふるさとそぞろにしのばれる                                   |
|    | ② 昨日、今日も雪の降 <u>れれば</u> 鶯来鳴けず                      |
|    | ③ 用事終 <u>れる</u> ものははや帰れ                           |
|    | ④ 文 <small>(ふみ)</small> も読 <u>まれず</u> になりけり       |
|    | ⑤ 人住まぬ家こは <u>れは</u> てて、その跡も <u>鋤</u> で起こされたり      |
| せ  | ① 御病日々に重 <u>らせ</u> 給せぬ                            |
|    | ② われ未来の大成を期 <u>せり</u>                             |
|    | ③ 父、子供に詩を作 <u>らせ</u> たり                           |
|    | ④ ひけども押 <u>せ</u> ども動かざりき                          |
| けれ | ① 世の中こと騒がし <u>けれど</u> 独り書を読みぬ                     |
|    | ② 花も咲 <u>けれど</u> 鶯来鳴かず                            |
|    | ③ 小松殿こそ大いにさわが <u>れけれ</u>                          |
| ぬ  | ① 花の咲か <u>ぬ</u> 木もあり                              |
|    | ② 死 <u>ぬ</u> 人あり生るる人あり                            |
|    | ③ 花咲き <u>ぬ</u> べきほどのこず <u>え</u> こそ見どころ多 <u>けれ</u> |
| つ  | ① 見るべきものは <u>すでに</u> 見 <u>つ</u>                   |
|    | ② ごみを捨 <u>つ</u> べし                                |
| らむ | ① 心知 <u>れらむ</u> 人に見せばや                            |
|    | ② 知る人ぞ知 <u>らむ</u>                                 |
|    | ③ 久方の光のどけき春の日にしづ心なく花の散 <u>らむ</u>                  |
| なり | ① かの山は富士山 <u>なり</u>                               |
|    | ② はや夜ふけに <u>なりぬ</u>                               |
|    | ③ われ深くこれを恥 <u>づる</u> なり                           |
|    | ④ 呼子鳥小夜の中山呼 <u>び</u> 越 <u>ゆ</u> なり                |
|    | ⑤ 功 <u>なり</u> 名遂げて故郷に帰らばや                         |
|    | ⑥ 桜城あとに風静か <u>なり</u> き                            |

#### 4. 指導の経過 (2)

第Ⅱ次調査後は、教科書(三省堂、高等古文)の随筆文の単元で、特に徒然草の文を中心にして演

習した。適当な章段を予定して、助動詞を挙げたあと、その接続、活用、意味について指導してから、別の章段の文を演習させた。

#### 5. 第Ⅲ次調査

この指導後、その範囲(徒然草を主とし平家物語や方丈記の既習の文)について、次のような問題形式にして調査した。

一、次の文を読んで、問に答えよ。

久しく隔たりて会ひたる人の、わがかたにありつること、数数に残りなく語り続くこそありなけれ。隔てなくなれぬ人も、ほど経て見るは、恥づかしからぬかは。つきさまの人は、あからさまに立ちいでてもけふありつることとて息も継ぎあへず語り興ずるぞかし。

(1) 下線①～⑨の中から助動詞にあたるものの番号を書け。

(2) 下線①～⑨の助動詞の活用のしかたを右の表の中に○で書け。

イ	四段活用型	ロ	下二段活用型	ハ	ラ変型
ニ	ナ変型	ホ	形容詞型	ヘ	形容動詞型
				ト	特殊型

二、次の歌や文を読み、下線の部分を正確な国語になおせ。

- 1 あづまの方にてはなほする事にてありしこそあはれなりしか
- 2 がむなは小さき貝を好む、これ身を知れるよりてなり
- 3 あやふく心細きながらなにとしてつれなくけふまでながららむ
- 4 坊のかたはらに大きな榎の木ありければ人榎の木の僧正とぞ言いける。
- 5 養ひ立てし親子も行きかた知らず別れけり
- 6 人遠く水草清き所にさまよひ歩きたるばかり心なぐさむことはあらじ
- 7 世の中に絶えて桜のなかりせば、書の心ののどけからまし
- 8 心づきなき事あらむ折はなかなかその由をいひてむ
- 9 み格子をあけさせてみす(御簾)高く巻き上げたれば笑はせたまふ
- 10 あはれ今年の秋もいぬあり
- 11 この名しかるべからずとて、かの木を切られにけり
- 12 ましてその数ならぬたぐひ尽くしてこれを知るべからず

三、次の7つのグループの下線について助動詞ならばその意味（完了、打消……など）また用言の活用語尾の一部ならば、その品詞のらんに○をつけよ。

- |    |   |
|----|---|
| れ  | ① 筆とれば物書 <u>かれ</u> 楽器とれば音をたてんと思ふ                                |
|    | ② 野辺近く家ゐし <u>せれば</u> 鶯の鳴くなる声は朝な朝な聞く                             |
|    | ③ 雪降 <u>れば</u> 冬ごもりせる草も大も春に知られぬ花ぞ咲ける                            |
| せ  | ① 池の蛙とり <u>ければ</u> 御覧じかなしませ給ふ                                   |
|    | ② 御年六十二にて失 <u>せ</u> させおはしましけるを                                  |
|    | ③ うららかに言ひき <u>かせ</u> たらむおとなしく聞えなまし                              |
| れ  | ① 春来れば花も咲 <u>けれど</u> 山茂くして入りえず                                  |
|    | ② 月見ればちぢにものこそ悲 <u>しけれ</u>                                       |
|    | ③ 冬枯の <u>け</u> しきこそ秋にはをさ劣るま <u>じけれ</u>                          |
| つ  | ① 与一かぶらを取ってつがひよ <u>つ</u> ひいてひやうと放 <u>つ</u>                      |
|    | ② 心身の苦しみを着れば苦しむ時は休め <u>つ</u> まあなれば使ふ                            |
| ぬ  | ① をかしきこと言ひてもいたく興 <u>ぜぬ</u> と興なきことを言ひてもよく笑ふにぞ品のほど計られ <u>ぬ</u> べき |
|    | ① この獅子のたてよう <u>いと</u> 珍らし深き故あら <u>む</u>                         |
| らむ | ② 生 <u>けらむ</u> ほどは武にほこるべからず                                     |
|    | ③ 扉のあはひ七段ばかりはある <u>らむ</u> とこそ見えたり <u>けれ</u>                     |
|    | ① 与一その頃は二十ばかりの男 <u>なり</u>                                       |
| なり | ② 物語してゐたる程に人あまた来 <u>なり</u>                                      |
|    | ③ 判官ほどもなく三百余騎にぞ <u>なり</u> にける                                   |
|    | ④ 朽ち坊に入らせたまひけるみ心のうち推し測られ、あはれ <u>なり</u>                          |

### Ⅲ

以上実施した第Ⅱ次と第Ⅲ次の調査から、われわれは次のような結果がわかった。〔表Ⅱ〕

#### イ 助動詞の判別

助動詞を他の品詞と判別するように指示してある下線の語が少ないため（問Ⅰ）、誤答は少ないが、動詞、形容詞の活用語尾や接続助詞との混同した誤答は目立った。「ず」や「けれ」の誤りが少ないのは用言への接続が判別しやすいためと思われる。

#### ロ 活用

第Ⅱ次、第Ⅲ次いずれの調査でも成績は余りよくない。これは用言の活用を正確に覚えていないためと思われ、四段活用型とした誤答が多い。また語感から誤っているのもあった。（例、なれ、ぬ（打消）をナ変型としている。）

#### ハ 口語訳

文法的な意味を覚えていても、実際に誤った口語訳をしているものが多い。打消のず、推量のらむのような意味はその接続する用言の意味から考えて書いているが、過去と区別される完了や打消の意味をもつ推量のような複雑な語（ぬ、じ）に対して注意が十分でない。しかし第Ⅲ次調査では、完了の「り」「る」、推量の「む」、過去の「けり」の正しい訳が多くなっている。

#### ニ 同音異義語の取扱について

自発、受身、使役、尊敬などの助動詞はその接続する語から考えて意味が容易であり、また、打消、断定、推量（らむ）完了（つ）なども区別がつくようである。しかし、次のよう場合には誤答が多くなっている。

1. 可能、伝聞や「けれ」などはむずかしい。
2. 2字で単独の助動詞となったり、用言の活用語尾と助動詞の連語であったりするものの判別はむずかしい。
3. 一つの語が多くの意味に分かれるものの誤答も多い。しかし、口語訳の誤った語でも文法的意味の少ないものは区別が可能であった。
4. 動詞の活用語尾はだいたいわかるが、他の用言のものについては不安な点が残っている。

以上は助動詞の指導後の調査を主としたもので、その具体的な指導については更に考究し実験しなければならないし、またこのような方法は文語学習として、当然助詞や文章論へと発展する楔機たるべきものと思っている。そして今後は文章論をどんな方法で古典解釈と結びつけるかが大きな課題であると痛感している。

最後に、この研究を進めるに当っては、国語乙は勿論、国語甲担当教官とも連絡し、その指導した後の調査資料を加えることのできたことを付記しておく。

入門期における古典の取扱について

〔表 I〕

第 I 次 調 査 (学習態度)

事 項	項 目	人 数
イ、 文法学習の好悪	1. 興味深くやれる	3
	2. 努力している	38
	3. 努力しているがやれない	48
	4. きらいでも学習する	13
	5. きらいでやらない	3
ロ、 困難の原因	1. 古文に十分なれていない	45
	2. 口語文法の知識が不十分	26
	3. かなづかい、活用が困難	19
	4. 体系的にまとめてほしい	15

ハ、 難しい品詞	順位			二、記憶の困難性								
	品詞	1	2	3	順位							
	助動詞	86	13	5	接続を知る	93	9	3				
	助詞	11	57	14								
	動詞	5	19	38					活用を知る	13	58	36
	形容詞	3	5	22								
	形動詞	1	4	9	意味を知る	4	37	64				

ニ、 記憶の方法	記憶の順序		方法の難易				
	項目	人数	順位				
	項目		1	2	3	4	
	種類から	45	種類からするのが難しい	12	25	48	20
	活用中心	30	活用中心が難しい	16	33	29	27
	暗記のみ	20	暗記のみが難しい	36	6	11	52
	接続中心	10	接続中心が難しい	43	39	16	7

ホ、 難易の助動詞	難 (15以上)	語	る・らる	べし	けり	らむ	なり	めり	ぬ		
		人数	33	29	27	21	17	17	15		
	易 (10以下)	語	ざり	じ	らし	まほし	しむ	たし	つ	む	まじ
		人数	1	1	2	3	5	5	8	8	8

〔表 II〕

第 II・第 III 次 調 査 (学習効果)

イ、 判 別	調査	正 答										誤 答	
		つる	し	けれ	たる	けむ	しか	なれ	ず	ぬる	ぬ	て	る
	II	78	96	104	97	87	26	68	102	—	—	54	75
III	56	—	—	85	—	—	—	89	72	83	—	44	80

II 次の問題文では 10語中から 8語 } の助動詞を考えるように指示した。  
 III 次の問題文では 9語中から 5語 }

教 科 共 同 研 究

口、活用	正 答 率			多 い 誤 答 (活用型と人数)	
	調 査 語	Ⅱ 次	Ⅲ 次	Ⅱ 次	Ⅲ 次
	つ る	42	57	四 段 15	四 段 14
し	52		〃 9		
け れ	34		下 二 23		
た る	41	43	四 段 29	四 段 28	
け む	34		ラ 変 10		
し か	42				
な れ	22		ナ 変 23		
ず	41	63	四 段 18	四 段 9	
ぬ る		40		〃 14	
ぬ		26		ナ 変 34	

ホ、口語訳(正答数)	調 査 語	し	る	らむ	けれ	らむ	ぬ完	ぬ打	じ	まし	て完	む	せ使	む	める	めり	
	Ⅱ	56	32	65	25	48	6	97	15	53	14	42	42	31	27		
	Ⅲ	60	57		61	57		93	18	59		52					13
調 査 語	べらなれ	つれ	じ	れ	けり	ず	べかり	けめ	ける	しか	(てむ)	させ	せ尊	に完			
Ⅱ	21	15	4	34	42	100	10	16	41								
Ⅲ					86	99 102			73	38	20	70	37	29			

二、同語異義の取扱 (正答数)	調 査 語	意 味	自 発	完 了	語 尾	可 能	語 尾	受 身
		れ	Ⅱ	44	22	36	26	39
	Ⅲ	51	32	65	36			
調 査 語	意 味	尊 敬	語 尾	使 役	語 尾			
せ	Ⅱ	54	44	78	64			
Ⅲ	64	54	86					
調 査 語	意 味	過 去	語 尾 + 助 動	過 去	形、語 尾	推 量(已)		
けれ	Ⅱ	9	8	22				
Ⅲ					13	16		
調 査 語	意 味	打 消	語 尾	完 了				
ぬ	Ⅱ	88	44	31				
Ⅲ	90		40					
調 査 語	意 味	完 了	語 尾					
つ	Ⅱ	68	49					
Ⅲ	74	55						

入門期における古典の取扱について

ら む	調査	意味	語尾+助動	語尾+助動	推量			
	Ⅱ		3	7	51			
	Ⅲ		23	10	69			
な り	調査	意味	断定	動詞	断定	伝聞	動詞	形動(尾)
	Ⅱ		59	28	14	9	15	26
	Ⅲ			37		23	53	25